

平石遺跡発掘調査概要・Ⅱ

—中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う—

2008年3月

大阪府教育委員会

はじめに

大阪府河南町平石谷一帯の中山間地域総合整備事業にかかる平石遺跡の調査は2年にわたって実施され、今回が最終年度となります。昨年度は平石集落近辺で平安時代から南北朝時代を中心とした遺構を発見しました。それによって正平15年（1360）足利義詮の焼き討ち以前の状況をうかがうことができました。それ以後は史籍に伝えられますように、平石一帯は活発に耕地が切り開かれていきます。平野部に比べればはるかに耕作し難いこの土地が、どのようにして現在見る良質な田畑に造りかえられていったか、今年度の調査からはこのことが明らかになりました。現在機械を使って新たな耕地が造られつつあります。しかしその土台となる棚田が、平石の溪水を啜^すって、朝な夕なに田を打ち続けた先人の弛まざる営みがなければ築き上げられなかったことでしょう。

調査に際しては、平石地区をはじめとする地元の皆様ならびに関係機関に多くのご協力いただき、深く感謝いたします。今後も文化財保護について地元の方々や広く府民の皆様にご協力をお願い申し上げます。

平成20年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 富尾昌秀

例 言

1. 本書は、中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う、南河内郡河内町所在平石遺跡の発掘調査（06014）概要報告書である。
2. 調査と遺物整理は、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて大阪府教育委員会が実施した。
3. 調査は、文化財保護課調査第二グループ技師枡本哲を担当者として、平成18年7月より平成18年12月まで行った。遺物整理は、調査管理グループ主査三宅正浩・技師藤田道子を担当者として、平成20年3月まで行った。
4. 本書に使用した座標値は世界標準座標値である。方位は座標北、標高はT.P.プラス数値で示している。
5. 航空写真は、株式会社アコードに委託して実施した。なお、撮影フィルムは同社において保管している。
6. 遺物の写真撮影は（有）阿南写真工房に委託して実施した。
7. 発掘調査および遺物整理・調査概要の作成に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。
8. 本書は、枡本が編集し執筆した。
9. 概要は、300部作成し、一部あたりの単価は343円である。

本文目次

はじめに

例言

第1章 調査の経緯と方法	1頁
第2章 調査の結果	4頁
第3章 まとめ	20頁

挿図目次

第1図 平石谷の遺跡分布図	1頁
第2図 南河内こごせ地区事業位置図	2頁
第3図 調査地の小字分布図(1/2500)	3頁
第4図 調査区位置図(1/500)	4頁
第5図 第1調査区平面図(1/250)・断面図(1/40)	5頁
第6図 第2調査区平面図(1/250)	7頁
第7図 第2調査区焼土坑平面図・断面図(1/40)	9頁
第8図 第2調査区南壁断面図(1/40)	10頁
第9図 第2調査区北壁断面図(1/40)	11頁
第10図 第2調査区東壁断面図(1/40)	12頁
第11図 第2調査区西壁断面図(1/40)	13頁
第12図 第3調査区平面図(1/250)・断面図(1/40)	14頁
第13図 第4調査区平面図(1/250)・断面図(1/40)	16頁
第14図 出土遺物実測図	18頁
第15図 第2調査区出土縄文土器拓影	19頁

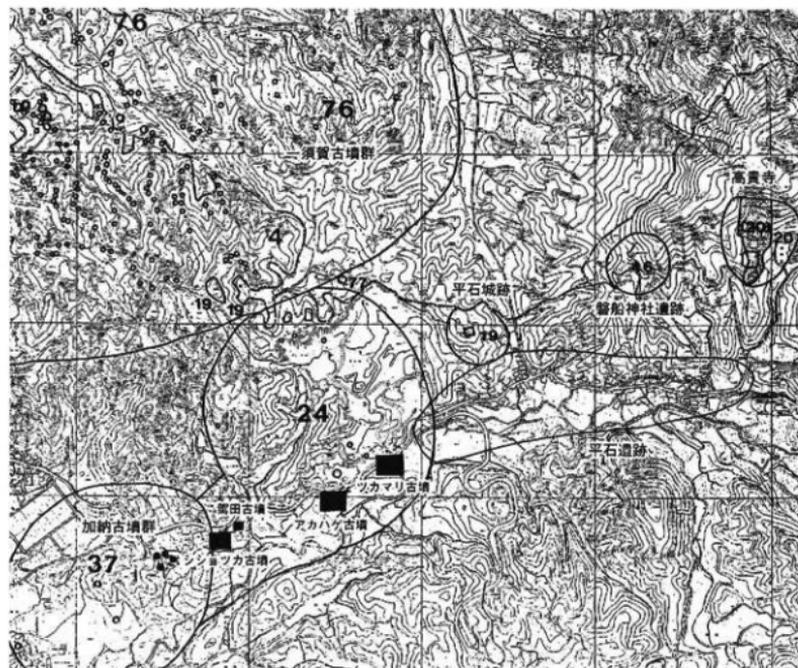
写真図版目次

図版1 調査地点全景
図版2 第1調査区
図版3 第2調査区断面(1)
図版4 第2調査区断面(2)
図版5 第2調査区遺構面
図版6 第2調査区焼土坑
図版7 第2調査区石器出土状況
図版8 第3調査区
図版9 第4調査区
図版10 出土遺物(1)
図版11 出土遺物(2)

第1章 調査の経緯と方法

今回の調査対象地は、グリーンロードが府道竹内河南線と交差し、その南で大きく東側に蛇行して持尾に至る途上の、西側一帯の棚田である。この地区は昨年度実施した平石川左岸で展開した小調査区のうち、「菖蒲谷」山の西麓に配したトレンチ1、5～9、21に隣接する。昭和55～56年に新設されたグリーンロードによって南北に分断された地形であるが、本来はやはり「菖蒲谷」山から西に長々と延びる尾根の端部にあたる。しかしこの付近では尾根は緩やかに西に傾斜し、その西裾を平石谷が北から南へ大きく蛇行する。その対岸に一昨年調査を行ったツカマリ古墳が立地する。平石古墳群と平石遺跡の分布限はちょうどこの付近で相接する（第1～3図）。

調査は原則として耕土を機械にて掘削し、それ以下を土層の堆積状態を確認しつつ、人力にて掘り下げた。本書に掲載した断面図は基本的に現在の耕土を除去した面以下の堆積土を图示している。したがって最上面の数値に0.2～0.3mを加えた数値がほぼ調査開始前の現耕土上面の標高値となる。

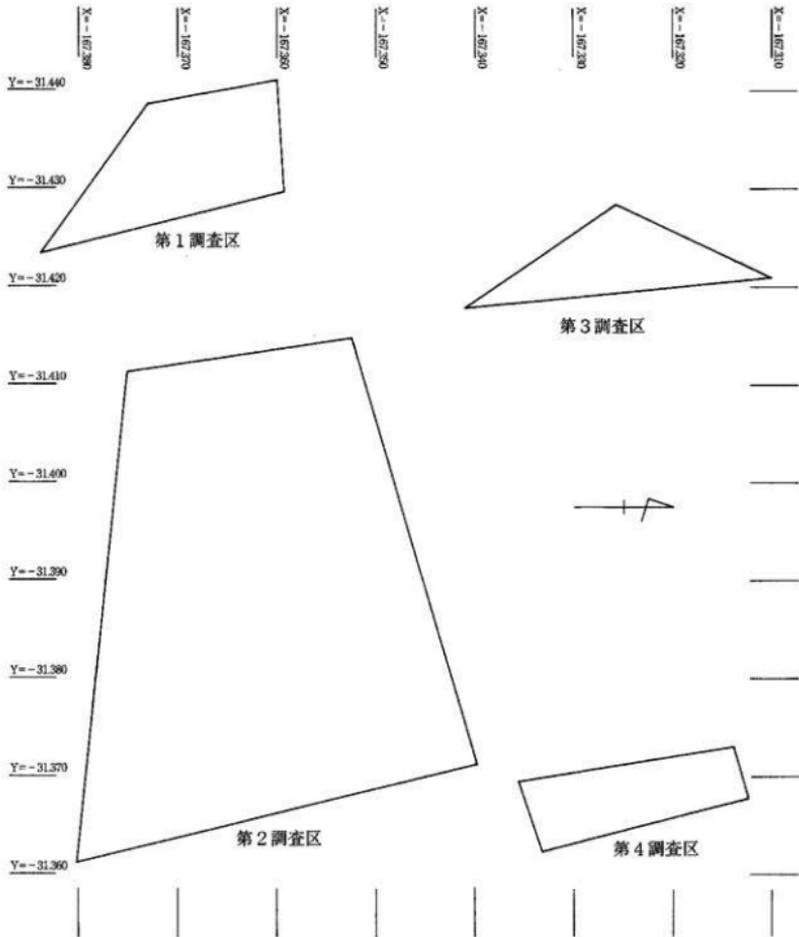


第1図 平石谷の遺跡分布図



第2図 南河内こごせ地区事業位置図

第2章 調査の結果

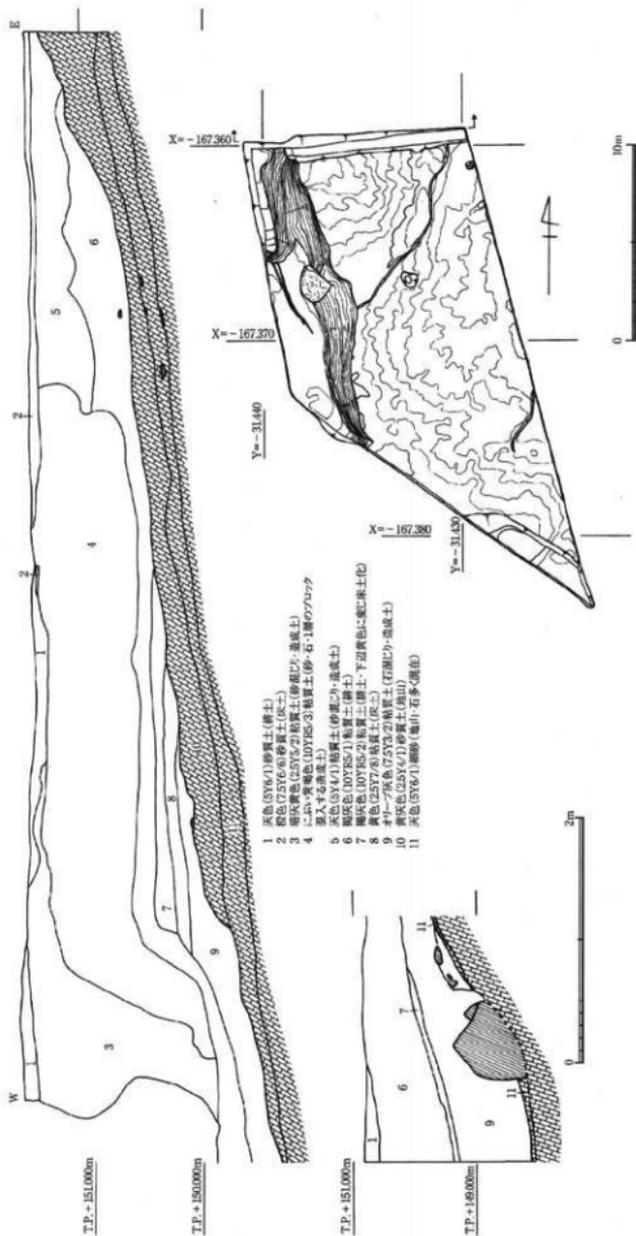


第4図 調査区位置図 (1/500)

第1調査区 (第4・5図)

調査区の座標位置は、 $X = -31.424 \sim -31.441$ 、 $Y = 167.359 \sim 167.384$ で示される。上底13.0m、下底25.0m、高さ11.4~12.0mの台形状の調査区である。面積は228㎡。現地表面の標高は、東辺T.P.151.43~151.45m、西辺T.P.149.9mを測る。

現耕土を除くと部分的に残る耕土の下は全て、水平な耕作面を得るための造成盛土となってい



第5図 第1調査区平面図(1/250)・断面図(1/40)

る。東端でT.P.151.3mを測る砂質土の地山は、西端ではT.P.148.6m付近まで低くなり、比高約2.7mで、西へと傾斜する。造成盛土中には新しい耕土のブロックを多く含む土（第4層）、さらにその下には盛土以前の旧耕土と床土の組合せ（第6～8層）が認められる。

現耕土は、これらの旧耕土の上に西端では厚さ1.5mにも達する盛土を行った上に築かれ、かつての東側の棚田を削った上を、西へ広げて一枚のより広い平坦な田にしたようである。

出土遺物には、以上の棚田盛土より出土した土師器・須恵器・磁器碗（網目文）の小片数点があるが、いずれも摩滅している。

第2調査区（第1・6～11図）

調査区の座標位置は、X=-31.362～31.415、Y=167.340～167.380で示される。現地表面の標高は、北東T.P.156.82m、南東157.84m、北西153.88m、南西153.93mを測る。面積は1494㎡である。今回の調査で最も広い調査区である。南東から西もしくは北西方向の平石川へ急激に下降する傾斜面手前の、安定した台地上のほぼ中央に位置する。

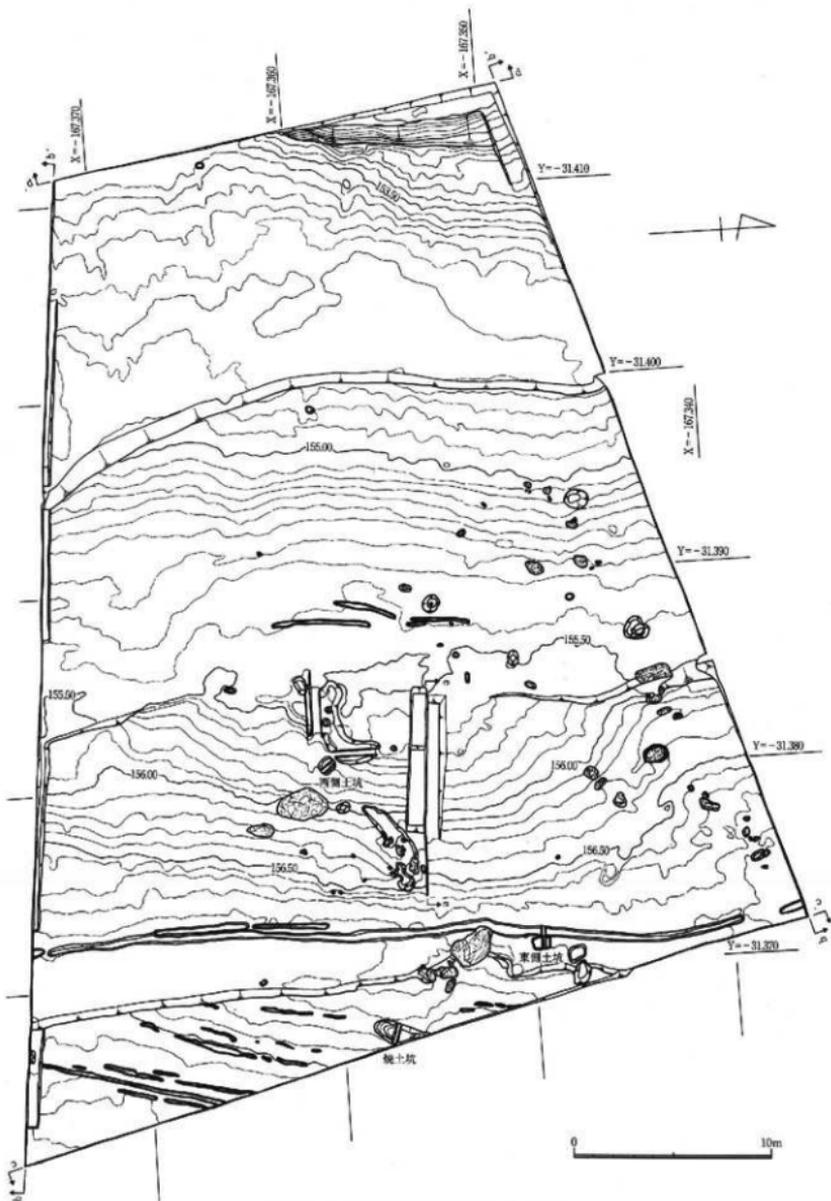
調査区は、東西幅13.0～15.0mの棚田ほぼ4枚分に当たる。先にも書いたように、現在調査地の東側は、グリーンロードにより西されているが、本来はその東の「菖蒲谷」の字名を残す山の西に伸びる稜線に続く、一連の尾根をなしていたようである。その尾根が平石川に傾斜する段丘を、段状に開墾して棚田としたものである。

20～30cmの現耕土を機械にて剥ぐと、それ以前の旧耕土の堆積が観察される。何度も繰り返された耕地化の痕跡である。東の高所を削って西の低所へと盛土し、より広い平坦な耕作面を拡張していった様子がうかがえる。東の1段目として棚田では耕土以下直ちに平坦な地山が露呈しているので本来その上に堆積していた旧地形の堆積土はまったく残っていない。3・4段目も現在の棚田は何度も盛土を繰り返した上に行われていたが、その盛土の最下はやはり削平されていた。しかし2段目は東側にやや平坦な削平を止めてはいるが、その西側は本来傾斜面であったためか、削られた痕跡はなくむしろ東側を削った土を盛り上げて、高い部分とのレベルを合わせている。このため、この傾斜面には棚田造成盛土以前の古い土の堆積が特に中央部に認められた。

調査区北西隅では深く落ち込むが、これは第3調査区南端で観察された落ち込みと連続し、かつては一段低い棚田として地下げされたのである。それが第1調査区東半部の平坦な削平面に相当する。しかしこの北西隅の落ち込みは、新旧の耕作土や地山のブロックを多く含む土を積み上げて、現在の一枚田として西へ拡張した模様である。

調査区四壁を利用した堆積土層の観察では、おしなべて以上のような耕作土の累積がみられたが、南壁断面では東から2枚目の棚田に当たる部分で、表面が鉄分の沈着により硬化した暗い灰黄色の粘質土の堆積が認められ、この土からは縄文土器・土師器・須恵器・サヌカイトなどの破片が出土した。

このような土層の堆積は調査区中央にもみられたので、同じ棚田面の中央に東西方向の小トレ



第6図 第2調査区平面図 (1/250)

ンチを設定して、棚田造成以前の堆積土の観察を行った。それによると3層の堆積があり、上・中層の灰色系粘質土からは、8世紀代の土師器、須恵器、瓦器、サヌカイトの破片が含まれるが、中層では瓦器は出土しない。この中層が南壁の遺物包含層の粘質土に相当すると思われる。

要するに、堆積土から見れば中世以降の棚田造成でそれ以前の古い包含層はほとんど消滅しているが、削平されてもお窪みのようなところ（中央部）には残存し、それらは少なくとも当地が耕地になる以前の土地利用を反映していると考えられるのである。8世紀代の遺物は、従来の平石谷のどの地点でも出土している。

遺構 遺構として取り上げるものは、棚田造成痕を除けば、耕作用鋤溝、上下の棚田の境を通る排水溝、焼土坑、耕地整備で邪魔になる石を埋め込んだり、抜き取ったりした石の処分跡などがある。

鋤溝

耕地造成のため削平された平坦面をよく留めた調査区東側（ $X=-31.370$ 以東）でよく残っていた。幅10～20cm、深さは数cm程度の浅い筋状の溝である。方向は、発掘前に植え付けられていた豆畑の南北の畝溝と同じである。埋土はすべて旧耕土である。

排（配）水溝

現在も使用されている棚田と棚田の境に沿う溝に重複する。田植えの時期には、上流の谷水を取り込んで、標高の高い地点から低い地点へとまんべんなくすべての田に水が行き渡るように、どの棚田の水取りについても地元では取り決めがある。この種の溝はそれぞれが無駄なく連結されて一定地区の田に上から下へ水が配られる仕組みになっている。養稲の配水に供し、大雨や雨続きの季節には排水に便となる。一部に切り合いが見られるが、溝ざらえの名残りかもしれない。

石の処分跡

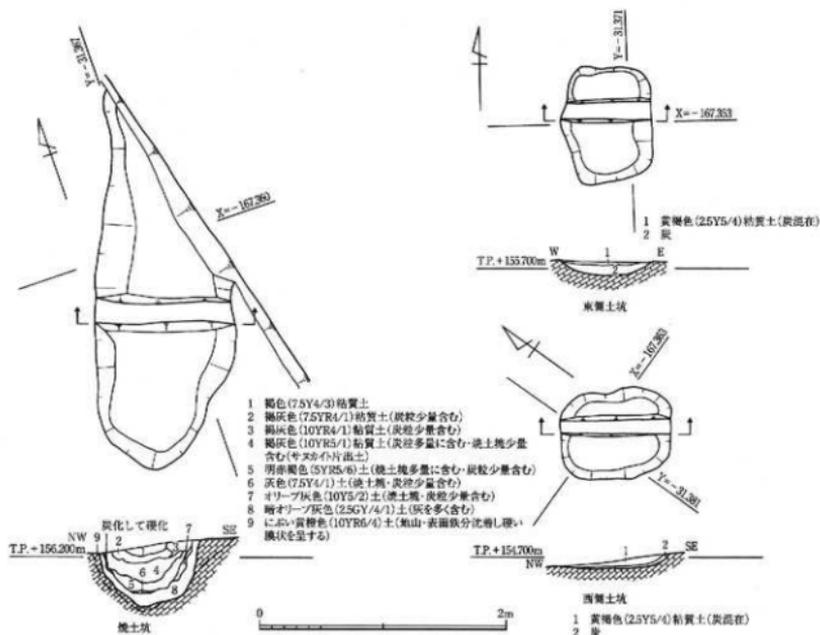
数箇所で見られた。抜き取ったり埋めたり削って減じたり耕作に邪魔にならないような必要な処分をしている。第4調査区のもの比較的大規模に石を投棄し埋め込んでいたが、本調査区では東側の高い地盤で、平坦面を得るのに削平しているところでは、抜き取り以外に風化した花崗岩を削って床付けに支障のないようにしているところがある。また一段下の棚田を造成するのに、斜面地に土を盛り上げて高い部分とレベルを合わせる必要のあるところや、上下の棚田の境に当るところでは、大きい石であればそのままにしている。その上に造成土を盛り上げるので床付けの際には妨げにならないのだろう。

焼土坑

3箇所で見出されている。

焼土坑1

調査区東辺中央にかかる検出長2.8m、深さ0.5mの南北に長い土坑である。その方向は同じ棚田で見出された前記の鋤溝のそれと同じである。堆積土は8層に分かれる。第1層以外は全体的に炭粒を含み、第4～6層ではさらに焼土塊を少量まじえる。最下層の8層では灰が多く、その



第7図 第2調査区焼土坑平面図・断面図(1/40)

上面では炭化して硬くなる場所もある。穴で焚き火を繰り返した痕跡と思われる。第4層から石炭1点(第14図33)、サヌカイト小片が出土している。

焼土坑2

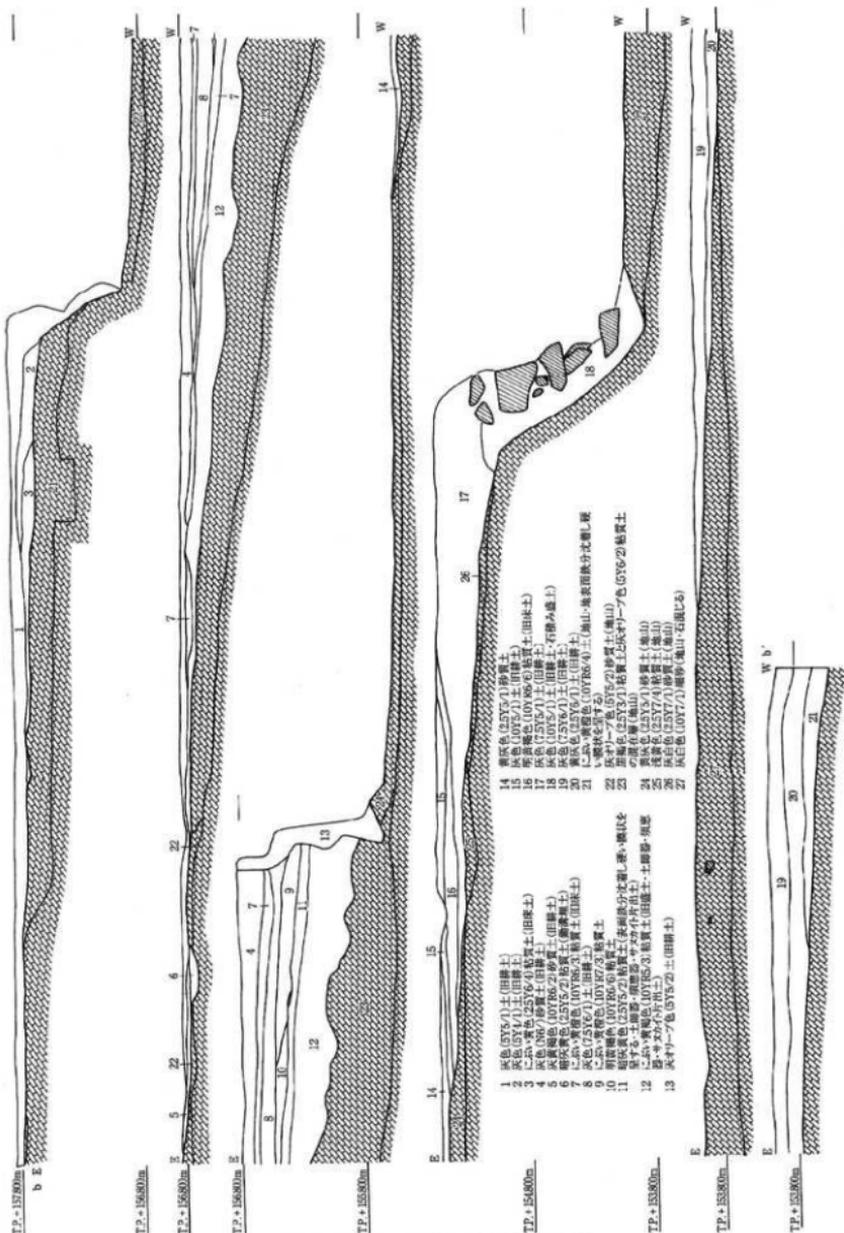
焼土坑1の北西9mのところに掘りこまれたほぼ長方形の1.0×0.7m大の土坑である。浅い掘鉢状で、堆積土は2層に分かれる。下層は炭のみである。出土遺物はない。

焼土坑3

調査区中央の傾斜面で検出された。ほぼ0.8×0.6m大の土坑である。堆積土は2層、下層は炭である。出土遺物はない。

焼土坑2・3は、焼土坑1と違い、燃え尽きて炭となった藁の形がうかがえ、繰り返し焚き火が行われた形跡とは考えられない。耕地造成に邪魔になる石の周囲で火を焚き、その後水をかけて冷やし、亀裂の生じたところを狙って砕き、小さくする作業の結果認められる土坑(平成17年度調査土坑9「平石遺跡発掘調査概要・I」27頁参照)とも異なっている点で、農作業での一時的な焚き火だろう。

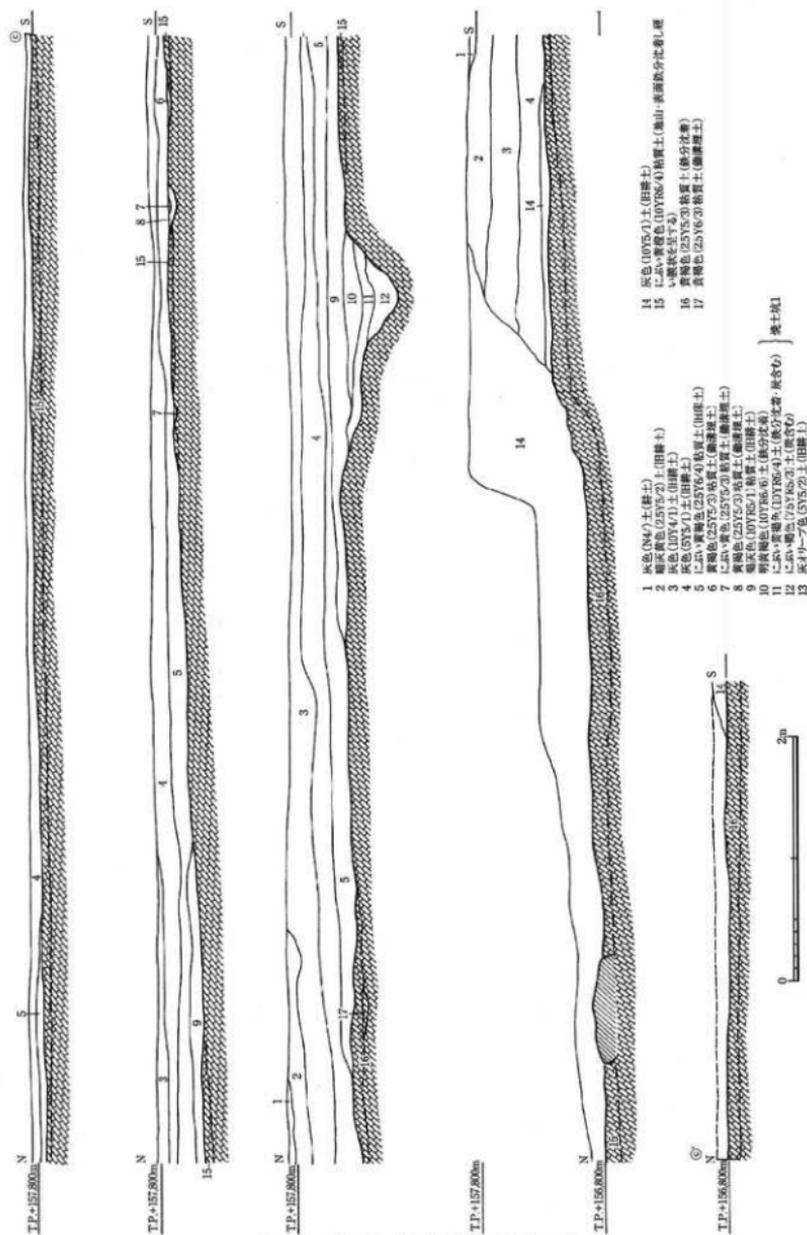
前記した棚田造成以前の土から奈良時代の土器に紛れて出土した縄文土器片とみられるものがある。胎土・厚さなどからみて縄文後期の前半と考えられる。



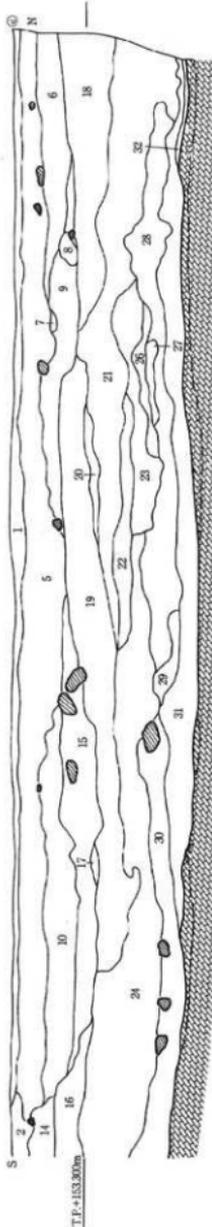
第 8 区 第 2 調査区 地層断面図 (1/40)



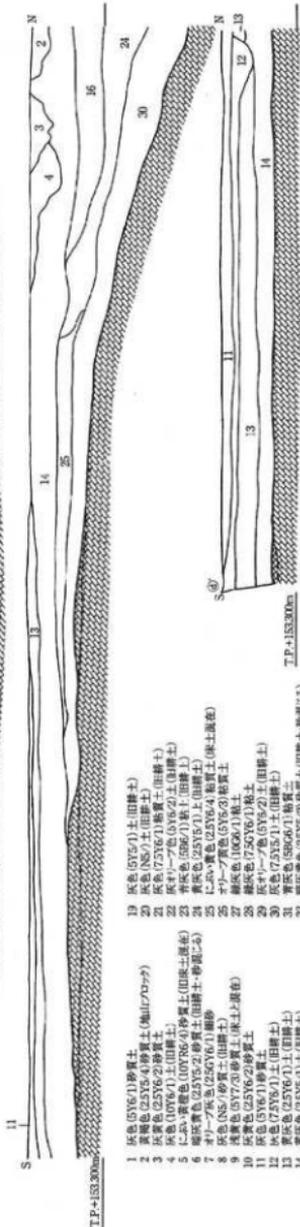
第9図 第2調査区北麓断面図(1/40)



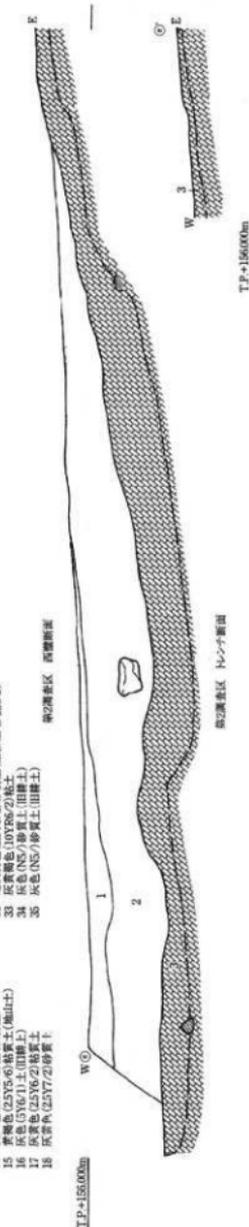
第10図 第2調査区東断断面図 (1/40)



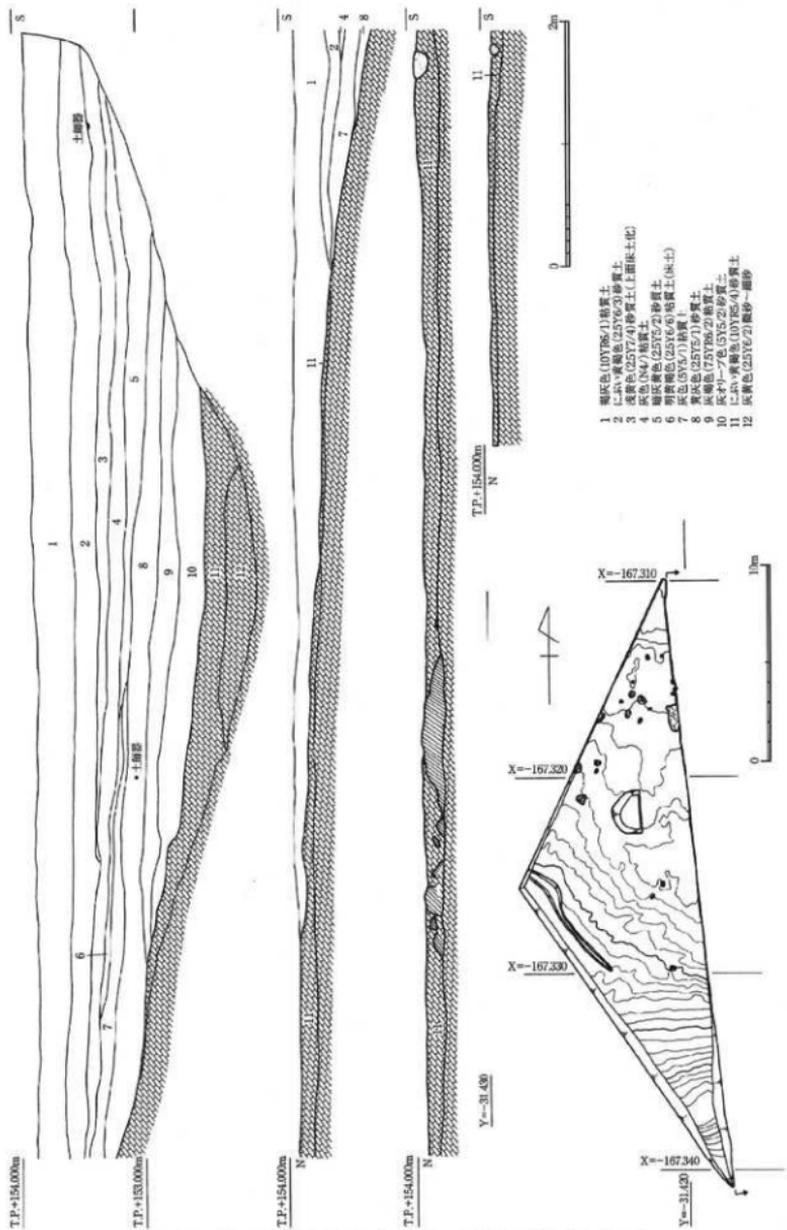
第11図 第2調査区西端断面図 (1/40)



- 1 灰色(SY6/1)砂質土
- 2 黄褐色(SY5/6-6)砂質土(地山/ワツバ)
- 3 灰褐色(SY5/6-2)砂質土
- 4 灰褐色(SY5/6-1)砂質土
- 5 にごり混濁色(OY5/6-4)砂質土(地山土混雑)
- 6 暗灰褐色(SY5/6-2)砂質土(地山土混雑)
- 7 オリーブ灰色(SY5/6-1)細砂
- 8 灰褐色(SY5/6-2)砂質土(地山土混雑)
- 9 灰褐色(SY5/6-1)砂質土
- 10 灰褐色(SY5/6-2)砂質土
- 11 灰褐色(SY5/6-1)土(地山土)
- 12 灰褐色(SY5/6-1)土(地山土)
- 13 灰褐色(SY5/6-1)土(地山土)
- 14 灰褐色(SY5/6-1)土(地山土)
- 15 黄褐色(SY5/6-6)粘質土(地山土)
- 16 灰褐色(SY5/6-1)土(地山土)
- 17 灰褐色(SY5/6-2)粘質土
- 18 灰褐色(SY5/7-2)粘質土
- 19 灰褐色(SY5/1)土(地山土)
- 20 灰褐色(SY5/1)粘質土(地山土)
- 21 灰褐色(SY5/6-1)粘質土(地山土)
- 22 黄褐色(SY5/6-1)粘質土(地山土)
- 23 黄褐色(SY5/6-1)粘質土(地山土)
- 24 黄褐色(SY5/1)土(地山土)
- 25 にごり混濁色(SY5/6-4)粘質土(地山土混雑)
- 26 オリーブ灰色(SY5/6-1)粘質土
- 27 暗褐色(SY5/6-1)粘質土
- 28 灰褐色(SY5/6-1)粘質土
- 29 灰褐色(SY5/6-2)土(地山土)
- 30 灰褐色(SY5/6-1)粘質土
- 31 黄褐色(SY5/6-1)粘質土(地山土)
- 32 黄褐色(SY5/6-1)粘質土(地山土)
- 33 灰褐色(SY5/6-6)粘質土(地山土)
- 34 灰褐色(SY5/6-1)土(地山土)
- 35 灰褐色(SY5/6-2)粘質土



第2調査区 トラツツ断面図



第12図 第3調査区平面図 (1/250)・東壁土層断面図 (1/40)

第3調査区 (第1・12図)

調査区の座標位置は、 $X=-31.420\sim 31.430$ 、 $Y=167.340\sim 167.310$ で示される。底辺30.0m、高さ9.0mの二等辺三角形形状の調査区である。面積は139㎡である。現地表面の標高は、T.P.153.90mを測る。

北端では厚さ20~25cmの耕土を除去すると、直ちに砂質土の地山が露呈する。北端より南へ16.0m付近から徐々に南へ傾斜し、21.0m付近に至って急傾斜をなし、26.0m付近では深さ約1.5mでほぼ平坦となる。南半の深い部分を埋めて現在のよう一枚の耕地としている。ただ、この深い部分の堆積土には旧い床土化した土(第3、6層)も認められるから、かつては低所に一段低い棚田が営まれていたものと思われる。北半部で褐色土が帯状に回るほぼ円形の落ち込みを検出したので、南北方向に切って断面観察を行った。その結果樹木の抜き取り穴を埋めたことが分った。埋土にはブロック状に混ざった耕土の灰黒色土や地山の土もみられた。この状況は平成15年度にアカハゲ古墳の築かれた一の禿山塊の支脈の尾根の南端の斜面地の棚田の調査で検出した土坑212・228などの堆積状態(『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・IV』69~79頁)と似ている。棚田造成に伴う開墾の痕跡だろう。

盛土より土師器片が出土したが、小片で器種はわからない。ほかに遺構・遺物は認められなかった。

第4調査区 (第1・13図)

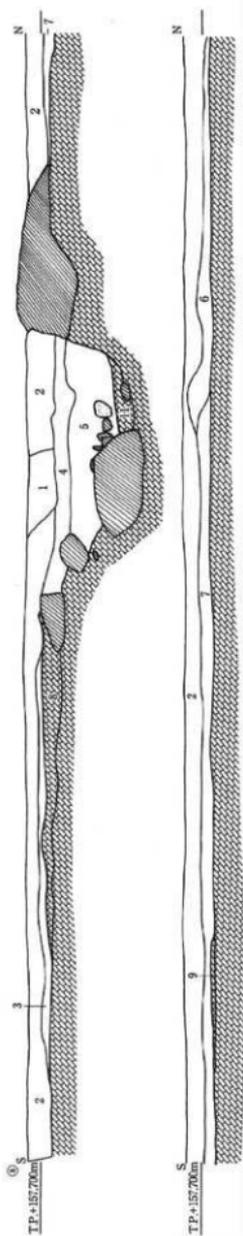
調査区の座標位置は、 $X=-31.360\sim 31.380$ 、 $Y=167.660\sim 167.680$ で示される。東辺21.5m、西辺22.0m、南辺7.5m、北辺5.5mのほぼ長方形の調査区である。面積は142㎡である。現地表面の標高は、T.P.157.81~157.86mを測る。

20~25cmの現耕土を除くと、旧耕土であるにぶい黄褐色土(第2層)が現れる。層厚はトレンチ西辺断面では20cmであるが、北辺断面の東西方向では西端で20cm、東端では削平され消失してしまい、東から西へ傾斜している。それより下には数層の盛土層が認められる(第3,8,10層)。西半部はもはや平石川に下降する斜面地形となる。

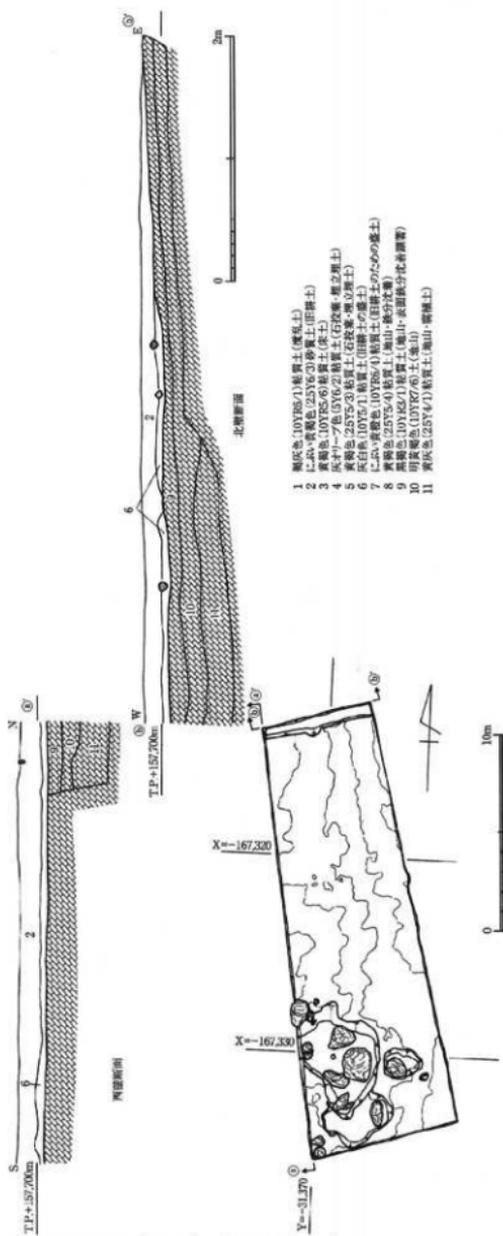
これらの土層は床土(第2層)であったり、耕土を載せる盛土(第8、10層)であったりするが、古くはそれらも耕土そのものであったようである。第2層からサヌカイト片、土師器片が少量出土している。

トレンチ南西端では、南から北にかけて8mの間に、不定形な掘り込みがあり、1.0~1.5mの大きい石が投棄されていた。また底面には7m以上になるとと思われる岩の一部が露呈していた。埋土は2層で、上層の粘質土からは電柱据付のワイヤー、電柱の底に打ちつけられていた、長さ13.0cm、幅3.5cm、厚さ0.5cmの杉板に電柱番号を記したものが出土した。

この掘り込みは、現在の耕地を造成する際に邪魔になった石を集めて埋め、その際当時の電柱を外して一緒に廃棄したらしい。そのほかに遺構は検出されなかった。



第13図 第4調査区平面図 (1/250)・断面図 (1/40)



各調査区の出土遺物（第14図）

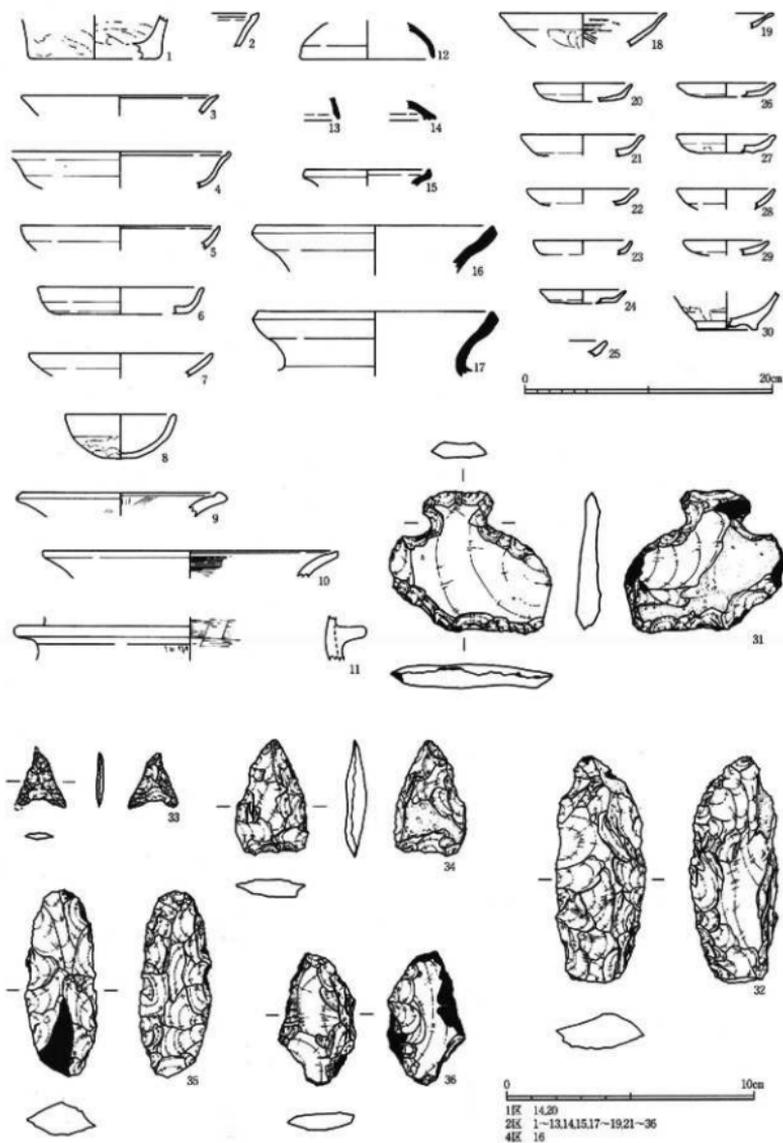
遺物は石鎌・石匙などの石器、サヌカイト片、縄文土器片、弥生土器片、土師器・須恵器片などがある。図化しえる破片を出土したのはほとんど第2調査区の棚田2段の斜面地中央部に堆積していた粘質土からであった。その他の遺物はすべて棚田造成盛土中より出土している。

1は、厚い平底（径10cm程）の底部片で外側面をヘラナデし、内面は強くナデている。弥生土器かと思われる。2は布留式甕口縁部の破片かと思われる。同時期の甕は昨年度実施した調査区のうち今回の地点に接するトレンチでも出土している。3～8は土師器杯・皿類で、端部を内側の巻き込む形態（3・4）や碗形（8）がみられる。時期的には8は飛鳥Ⅰ、その他は8世紀中頃が考えられる。9～11は土師器甕・罎釜である。8世紀代である。12～14は須恵器蓋。12は須恵器杯Hの、14は須恵器杯Gの蓋、時期的には先の8に近く、飛鳥Ⅰ～Ⅱと考えられる。平石のこれまでの調査では飛鳥時代の遺物は、奈良時代のそれに比べて少ないが、平成12年度に加納古墳群や平成14年度のアカハゲ古墳周辺でも出土している。13はそれらより古い須恵器の杯蓋かもしれない。16・17は8世紀代の須恵器甕である。18は瓦器碗内面に粗いミガキが残る。19は瓦器皿、20～29は土師質小皿。いずれも平たい底部から一段ナデを施す口縁部が立ち上がるが、屈曲をつけて短く立ち上がるものや底部から滑らかに延びるものなどバリエーションがある。概ね13～14世紀の器と思われる。30は唐津焼きの碗で灰釉がかかり、胎土目で、高台は卜幅、三日月。17世紀初めの器である。

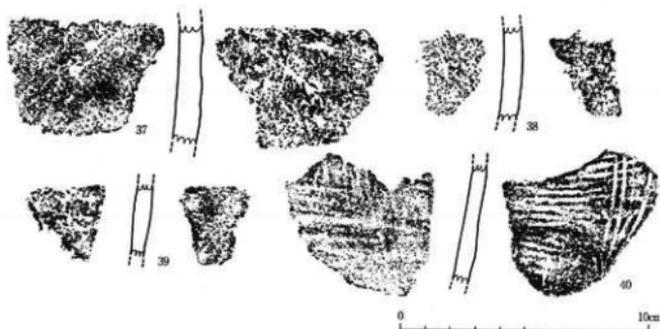
石器は製品もしくは未製品と考えられるものを図化した。31は横形の石匙である。39.2gを測る。32は凹基式石鎌、0.9gを測る。33は平基式石鎌、10.4gを測る。34は石槍もしくは縦形石匙の未製品とみてはどうか。57.3gを測る。35は石槍と思われる。30.7gを測る。36は新しい欠けが目立つが、刃器の破片と思われる。13.5gを測る。

最後に、わずかに出土した縄文土器片について特徴を記しておきたい。破片は胎土に粗い砂粒を含むもの（37～39）で、厚さ0.8cmの大きい破片（37）、それに厚さ0.6cmの砂粒の目立たないもの（40）の2種がある。胎土に砂粒を多く含む厚手のものに文様があれば中期とみなしたいが、それが無いので後期の前半あたりに考えたい。また後者には内面に横方向の、外面には縦方向の条痕が認められる。しかし内面の横方向のそれは引いてつける擦痕のようなものではなく、一見タタキのように見え、その施文には平たく幅のある道具が用いられたようである。しかし胎土・手法・厚さなどから前者と同じ時期とは考え難い※。

※ 縄文土器については、宮野淳一氏より御教示いただいた。



第14图 出土遺物実測図



第15図 第2調査区出土縄文土器拓影 (1/2)

第3章 まとめ

平成11年度に実施した試掘調査によってその存在が確認された平石遺跡の調査は、昨年度と今年度の2年にわたって実施したことになる。昨年度の調査では平石右岸の現在の集落に近接する個所と左岸の耕地一帯の状況がある程度明らかになった。現在の家屋が占める区域は右岸の地形から見て最も居住に適している。おそらく過去においてもそれは変わりなかったと思われる。しかしその地下にどのような埋蔵文化財が存在するかは何かの機会に調査を実施し、堆積土の観察をしないかぎり今のところは不明とせざるをえない。しかしそうではあっても、平石谷の一帯において大規模に計画された圃場整備にかかる区域の調査結果はこの遺跡の内容を概ね反映しているものと考えたい。

今年度の調査はこの遺跡の分布範囲ではほぼ西限にあたり、平成16年度まで実施してきた平石古墳群の東限と谷を挟んで相対する位置にある。山麓の標高が高くなればなるほど傾斜は急になり、低くなればその逆となる当地の場合、高いところの田畑は等高線の頻繁な傾斜変換ラインに比例して面積は横長の狭隘なものとなり、逆に低くなるにつれてより幅広の面積を確保しているようである。広く平坦な耕作面のほうが作業の効率がよいためか、古い田畑の上に土を盛って耕作面を前面に、つまり谷に向かって伸ばすことが繰り返して行われてきた様子がうかがわれた。削れるところを削ってその土を低いところに下ろし新たな床付けの基盤とするわけである。

このような作業が古くから行われてきたから、棚田の造成土には地山の土も古い耕土もさらに遺物包含層と考えられる土も混在する結果となる。今回の出土遺物もそのような二次堆積に伴うものが大半である。第1調査区西半、第2調査区西半、第3調査区の南半は急激に谷に向かって落ち込む地形の縁辺であるが、ここに大量の土砂を放り込んで東側からの棚田を西へ拡張している。土砂には現在の耕土のブロックやガラが混じり、機械によって造成した様子もうかがわれた。現在加納方面から平石集落へ伸びる府道に沿って設置されている電柱以前の電柱は、府道南下の棚田の畦際に設けられたようで、それが取り外された痕跡はこれまでの調査でも何箇所かで確認されている。その抜き跡が現在の谷に近接した低いところの田畑の地下に往々検出されるから、このようなところはもっとも新しい開発が及んだとみられる。

昨年度実施した標高170～180mに達する山中の棚田では耕土中に比較的残りのよい土師質小皿など中世遺物が出土した。しかしこの標高よりさらに高いところには、今や草木に被われて放置されたかつての棚田がなお認められた。地元平石の平岩氏宅には田畑図が保存されており、そこにはほぼ大和との分水嶺に及ぶ高さまで累々と細かい棚田が築かれていた様子が描かれている。しかし現在その付近に足を踏み入れても灌木に妨げられて立ち入るのが困難なほどの荒地となってしまう。以上のことから谷に近い比較的緩やかな傾斜面の耕地が無駄なく利用することができるようになると、自然と山間部に作業の手は及ばなくなつたらしい。昨年度の概要報告に

も触れておいたが、高貴寺門前周辺の山麓部からそれより低い現在の街道沿いに家屋を移したと伝える在所の方のお話もこのような低地の開発の動きに連動した結果であった。

しかし谷に近いところに進出してくると水利の便は改善されてもその分水害に脅かされる可能性も大きくなる。河南町では梅川・東條川・佐備川の最下流に位置する一須賀・山城・北大伴・山中田・東板持・西板持などでは大雨で度々洪水に見舞われ、堤防が決壊した。一須賀では昭和28年9月25日の東條川の決壊で田の真ん中に土砂の山ができたとか、板持の西にはこれも石川の決壊で生じた砂礫の山が無数に残りそれが塚とさえいわれていた。平石はこれらと環境は異なる山村であり、弘川・持尾・二河原辺の諸集落と同様、山の湧水に頼り、日照り続きのときは旱魃の害を受けるから自ら山谷に溜池を造ったが、地形の関係や自費請なので小規模であり、毎年土砂が堆積して水の溜まりが少なかった。ところが一方、このようなところでは大雨のとき階段状の水田は崩落が度々で、斜面を誘導する井路が塞がったり滑り落ちたりした。上記の昭和27年の大雨ではこれらの山村で無数の崩落が生じたといわれている（野村1953）。

このような現象は昨年度の調査区の、特に標高の高い地点の棚田を対象とした調査で何度か観察したところであり、流土の後は再び土盛りを行い、新たに床付けするなど地まざる作業の様子を知るのである。昭和57年8月の台風10号による平石川氾濫の形跡は昨年度の第44～45調査区で確認したとおりであるが、山手の小谷とは違いそれらの水量を集めて流下する、いわば本流の河岸を、作業効率を高めるために耕地化していくうえで避けられない現象であった。現在は重機を駆使して旧地形を一変するほどの広く平坦なピラミッド形の棚田となり、河岸はコンクリート擁壁による人工水路に変貌している。それは平成11年に初めてこの谷あいには試掘のグリッドを設定した頃の地形からは想像だにできないほどである。要するに平石谷の営田の歴史は現在もお連綿と続いているのであり、整備された装い新たな耕地の下には古い装いをまとった姿が今なおおかに眠っているのである。

参考文献

- 大阪府教育委員会2000年『平石地区・桐山地区発掘調査概要』
- 河南町誌編纂委員会1968年『河南町誌』
- 河南町2004年『続河南町誌』
- 野村豊『水利史料の研究』大阪府農地部耕地課 1953年

最後になりましたが、現地調査に参加し、寒暑にめげず頑張っていたいただいた庵ノ前智博、佐藤三和子、原田亮子の諸氏に心より感謝申し上げます。また整理作業に助力いただいた大上馨、川東貴子、八柄あさ代の皆さんに御礼申し上げます。出土陶磁器については森村健一氏よりご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

写真図版



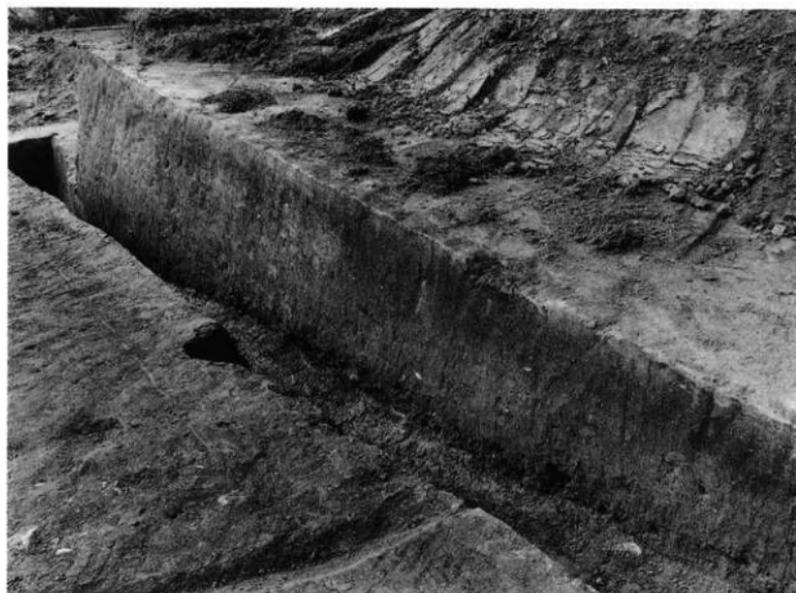
調査地より東方平石集落方面を望む



調査地より西方平石古墳群方面を望む



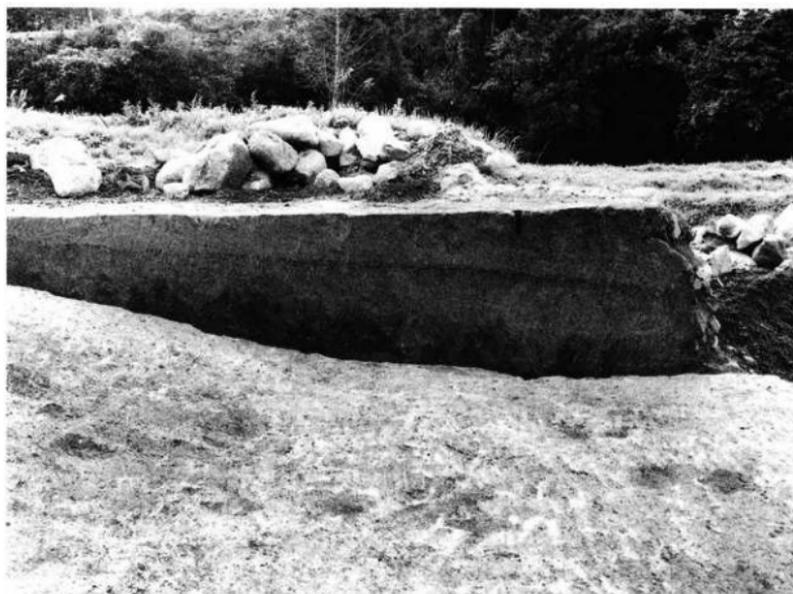
西壁断面 (南東から)



北壁断面 (南東から)



西壁 (東から)



南壁 (東より第2段目欄田) (北から)



北壁（東より第2段目欄田）（南から）



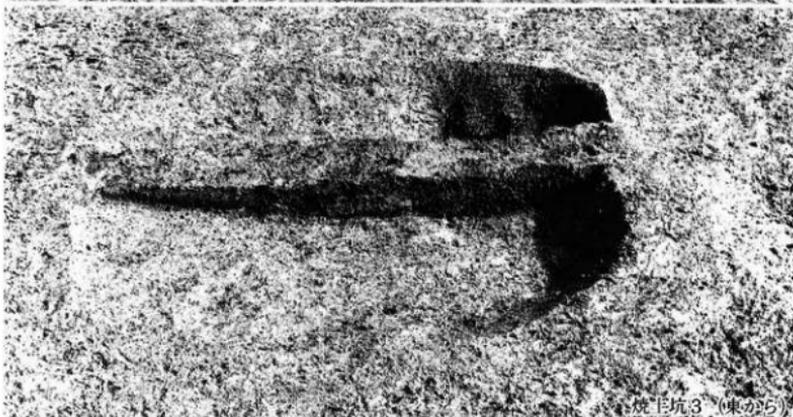
北壁（東より第3段目欄田）（南から）



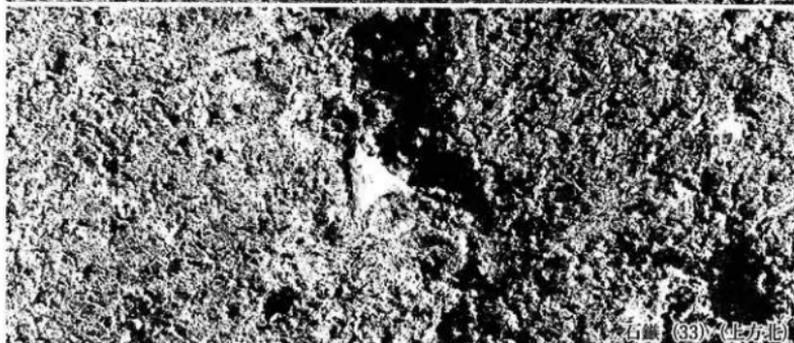
東より第1～3段棚田部遺構検出状況



同 細部 鋤溝他



上より焼土坑1～3



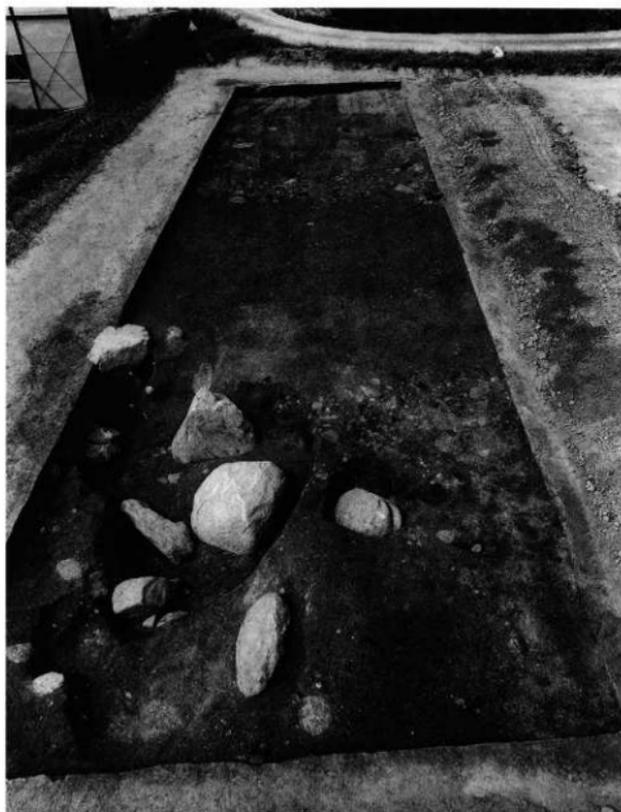
上より石匙 (31)、石鎌 (33)、石槍 (35) (上が北)



調査区全景 (南から)



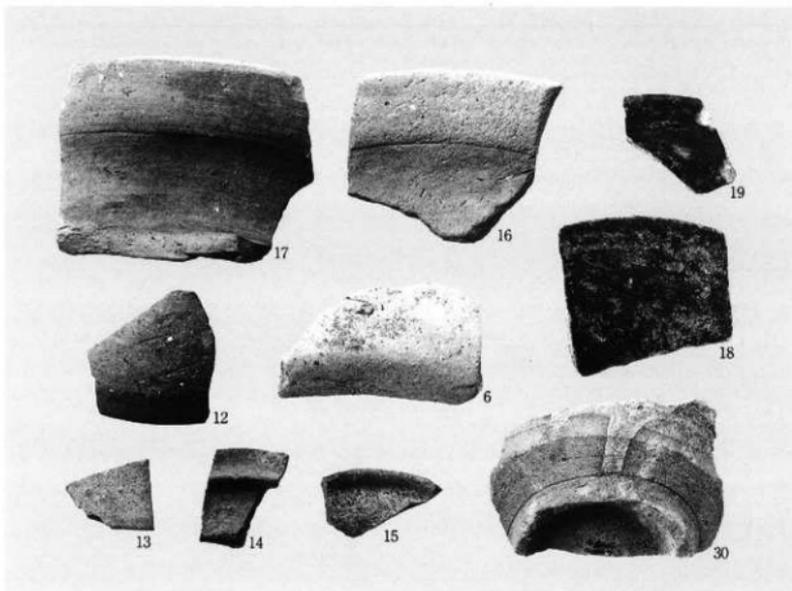
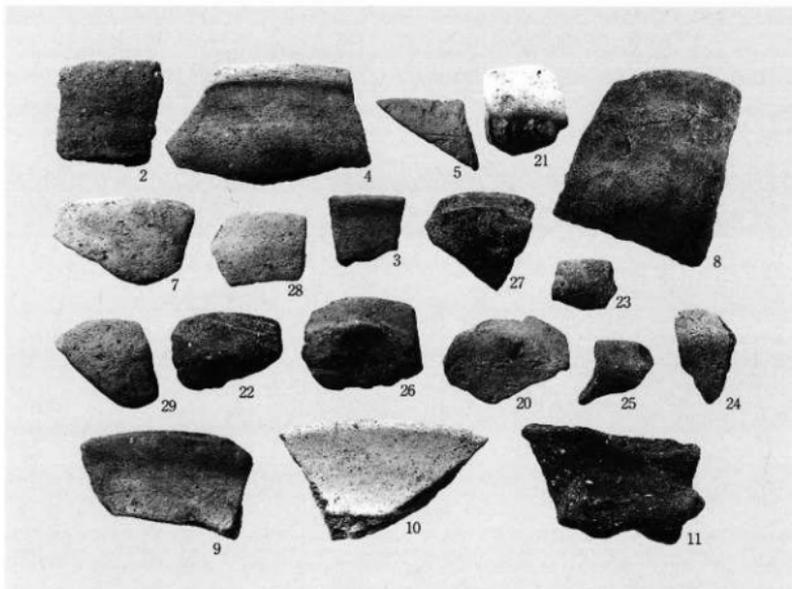
東壁断面南半部 (西から)

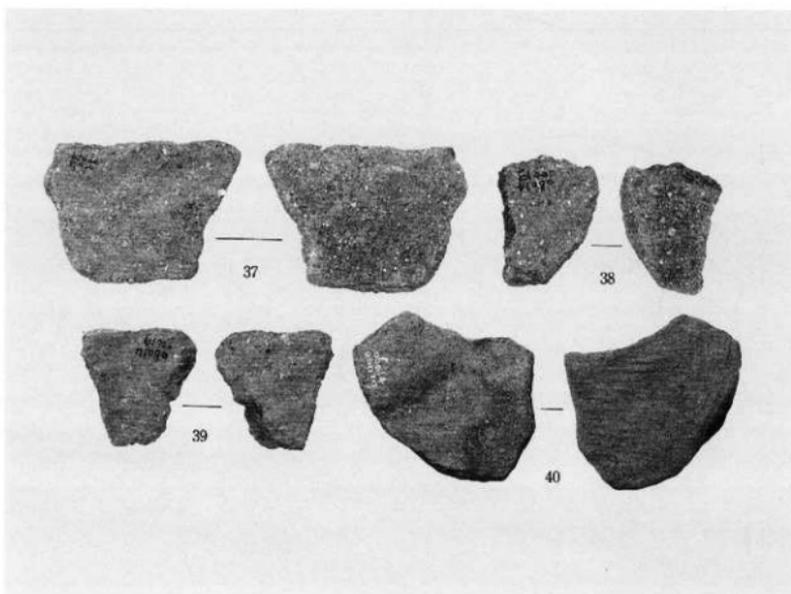
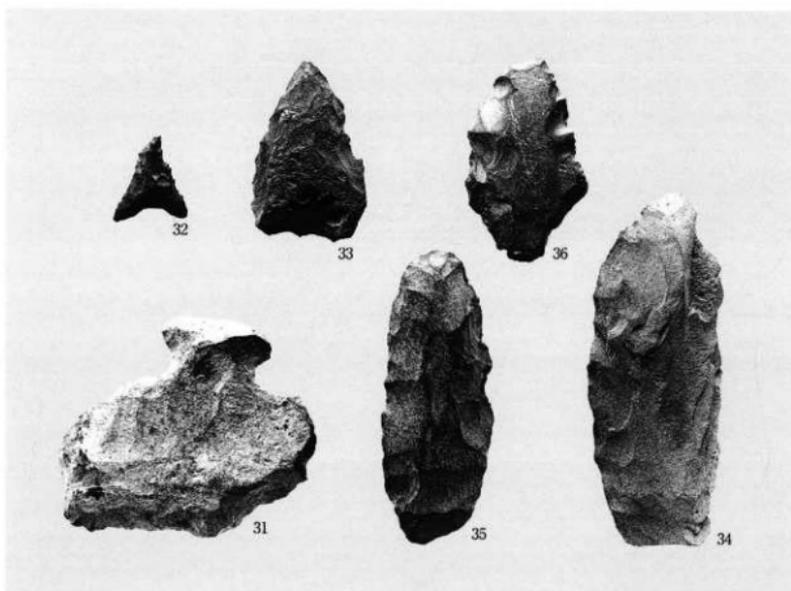


調査区全景
(南から)



西壁断面南半部 (東から)





報告書抄録

ふりがな	ひらいしいせきはっくつちようさがいよう
書名	平石遺跡発掘調査概要・Ⅱ
副書名	中山間地域総合整備事業「南河内ごこせ地区」に伴う
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	耕本哲
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらいしいせき 平石遺跡	なほこうち 南河内郡 河内町 平石	27382	53	34° 29' 38"	135° 39' 19"	2006年8月17日 ～ 2006年12月22日	1,957 ㎡	中山間地域 総合整備事業 「南河内 ごこせ地区」

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平石遺跡	耕作地	中世～ 近世	欄田造成 跡	縄文土器・ 土師器・須恵 器・陶器・ 瓦器	中世～近世の欄田造成跡
要 約	葛城山西麓から発する平石川の左岸で中世以降活発となる欄田造成の様子を明らかにできた。				

平石遺跡発掘調査概要・Ⅱ

－中山間地域総合整備事業「南河内ごこせ地区」に伴う－

発 行 大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL.06-6941-0351

発行日 2008年3月31日

印刷 (株)ウェイク
〒582-0001
柏原市本郷5丁目7-8

